

明治三十年前後に於ける鷗外の俳句作風

——子規との交流のなかで——

文学研究科国文学専攻博士後期課程3年 根本 文子

目次

- はじめに
- 一 鷗外の俳句観
- 二 鷗外の俳句実作（子規との交流以前 明治26～28）
- 三 子規と鷗外・戦場の出会い
- 四 「発句始」——明治文豪の句座（鷗外・漱石・子規）
- 五 『めさまし草』を巡って
- 六 その他の鷗外句
- 七 子規の鷗外擁護
- 八 鷗外と子規の草花
- 九 鷗外の子規評価（「鷗外漁史とは誰ぞ」）
- 十 『小倉日記』に記す鷗外の俳句
終わりに

はじめに

鷗外の俳句作品はあまり知られていない。とはいえ、子規が「明治に於ける俳句集の嚆矢」と序する日本派（子規派）の『新俳句』（正岡子規編、上原三川・直野碧玲瓏共編 明治31・3・14 民友社）に、明治の俳人の一人として取り上げられている以上、その作風を追跡する意味はあるだろう。俳人としての鷗外は子規との交流に三つの段階を踏んで進化、成長している。第一は明治二十九年一月三日の子規庵での「発句始」に鷗外が参加したことで、その句座は期せずして子規、鷗外、漱石、という明治の文豪三人が同席する場になったこと。第二は同年一月三十一日、鷗外が創刊した文芸誌『めさまし草』への子規派（日本派）の俳句掲載による交流。第三は明治三十一年の鷗外と子規の二人に共通する、草花への強い執着である。以上の三つの段階を踏まえつつ鷗外俳句の進化、成長の軌跡を辿り、中でも句数の多い小倉での作品を取り上げながら、「鷗外漁史とは誰ぞ」での子規評価を含めて二人の影響関係を考える。

一 鷗外の俳句観

鷗外の俳句作品が知られていないように、鷗外が俳句について言及しているものは殆どないのであるが、次の二作品を取り上げたい。

①は明治二十三年に『しがらみ草紙』に発表された「文海の藻屑」、②はそれから二十年余を経て俳誌『俳味』に掲載された「俳句というもの」である。

①「文海の藻屑」・「俳諧の進歩は平談俗話主義」

俳諧は其平談俗話主義を以て、詩材を取るべき版図を広め、終にこれに打ち勝ち、日本の韻文となりしも（略）、その正しきは汎通の詩性にして（略）その正しからざるものに至りては、審美の畛域を踰えなければ文学として論ずべきに非ず。（「文海の藻屑」明治23）

鷗外は、俳諧は平談俗話主義をもって詩材を求める範囲を広め、その平談俗話主義に打ち勝って日本を代表する韻文となった。しかしその正しきは汎通の詩性であり、その正しくないものは美（審美）の境界を越えているので文学として論ずべきではない、と云う。

「平談俗話」（「俗談平話」とも、鷗外は同じ意味で同文に両方使用）は、『三冊子』（服部土芳・元禄一五）に芭蕉の俳論として伝わる。芭蕉

は「俗語」を「詩語」として高めることを解いているので、鷗外がそうした俳書を読んでいた事が推測される。

明治二十三年の鷗外は二年前にドイツ留学から戻り、その一年後に創刊した『しがらみ草紙』は、成瀬正勝の評によれば「西洋美学に立脚した文学評論による啓蒙を目ざし、ドイツ留学からの帰朝者として新進気鋭の姿勢からいわば気負って生み出された」（成瀬正勝『めざまし草紙』）というものであった。「文海の藻屑」はそうした状況下で『しがらみ草紙』に書かれた鷗外の俳論である。

②「俳句といふもの」

俳句と云ふものを始めて見たのは十五六歳の時であつたと思ふ。（略）俳句の本は、誰やらが蕉門の句を集めた類題の零本で、秋冬の部文があつた。（略）分ると思ふ句と、分らぬと思ふ句とがあつた。

秋風や白木の弓に弦張らん 去来

と云ふ句がひどく気に入つて、こんな句がして見たいと思つた。その後俳句を少しして見たが、かう云ふ向きの句は一つも出来たことがない。何事によらず、自分の出来ない方角のものに感服してゐて、それが出来ずじまひになるのが、性分であるらしい。

（『俳味』俳誌。明治四三（一九一〇）・三、東京で創刊。大日本俳諧講習会の機関紙。編集発行人は貞金近松。明

治四四年八月から主催沼波瑠音の俳誌となる。大正五年

〔一九一六〕終刊『俳文学大辞典』

「文海の藻屑」から二十二年を経た明治四十五年の鷗外は、「俳句を少しして見たが」、去来のような句は一つも出来たことがない、と言う。そして「何事によらず、自分の出来ない方角のものに感服して」それが出来ずじまひになる性分であるらしい、と述懐する。

この少しして見た俳句が子規との交流の期間である。鷗外句は子規との出会いの前と後では大きく変化し、また進歩していると思われる。

二 鷗外の俳句実作（子規との俳句交流以前明治26～明治28）

明治二十六年『衛生療病志』第四十四号

「反動機関のいはく伝染病研究所建設地問題は

何故に中央衛生会に諮詢せざる

① 助言をかしあつさに碁の手ゆるむ時

北里柴三郎が辞表

② 濁されたあともしみづは清水かな

反動機関は今さらに芝区某等が上を云云す

③ 踏出した先やさつきのぬかり道

観潮楼主人の文一萬二千九百四十九と数へられて

④ 蟬（しみ）はたゞ一字々々にくひにけり

あまた、び山谷氏と呼ばれたりとて誇るべきことかは

⑤ 八千八声なんのおのれに聞かせうと

斯道のためならば千萬枝の筆禿すともよし

⑥ 夏草やわが筆づかをこの中に

拝見録

⑦ この一荷になひ得て好し氷水

この頃の鷗外の句の特色は、胸中のわだかまりを風刺を込めて吐露する寓意の句である。そして五七五で表現し得ないことは全てに前書きをつけて補足するという方法をとっているが、事情を知る一部の人以上には理解を得る事が難しい。今、鷗外の事情を知らない部外者として鷗外句の一部を読んでみたい。

鷗外句①

「反動機関のいはく伝染病研究所建設地問題は何故に中央

衛生会に諮詢せざる

① 助言をかしあつさに碁の手ゆるむ時

句意は、自分は助言などいらぬ、今の熟考は暑さに少しばかり碁の手がゆるんだだけなのだ。と知っているが実は建設地問題で中央衛生会に諮らない反動機関に皮肉を込めて抗議していると思

われる。

鷗外句②

北里柴三郎が辞表

② 濁されたあともしみずは清水かな

ペスト菌の発見で知られる北里柴三郎は鷗外の「独逸日記」に度々登場する。

句意は、涼しく清らかな清水は湧水なので一時的に濁されてもまたきれいな水に戻る、と詠みながらも、柴三郎が辞表を出さざるを得ないという事態に抗議しているであろう。

鷗外句③

反動機関は今さらに芝区某等が上を云云す

③ 踏み出した先やさつきのぬかり道

笠島やいずこさ月のぬかり道 芭蕉

前書きは反動機関への抗議であろうが、句は芭蕉句を踏まえている。芭蕉は「おくのほそ道」「笠島」で、五月雨のぬかるみに難渋し、身も疲れて、陸奥守であった藤原中将実方の墓のある「笠島」に立ち寄らずに通り過ぎた。

句意はこれを踏まえて、しかし自分はそうもいかず、踏み出した先の手強いぬかるみに難渋している最中である、という意か。

鷗外句⑥

斯道のためならば千萬枝の筆禿すともよし

⑥ 夏草やわが筆塚をこの中に

夏草や兵どもが夢の跡 芭蕉

同じく「おくのほそ道」「平泉」、「夏草や」の句は榮枯盛衰の感慨を伝えている。

鷗外はこの「夏草や」の句に触発され、今は唯、ぼうぼうと繁茂するばかりの夏草の中に自らの筆塚を立てたいという。筆塚は沢山の使い古した筆を埋めて供養するものであるから、斯道を文学の道と想定すれば句意は、千万の筆を費やしても生きる限り書き続けるという自らの決意を述べた句と思われる。

鷗外がこうした方法で俳句を創作していた明治二十六年当時、子規の俳句はどのようなものであったろうか。同時期の明治二十六年七月十四日「瀬祭書屋日記」から同じ季語「暑さ」を使った句を見る。

七月十四日 至宮本氏、出社

鳴りしきる電話の鈴のあつさかな 子規 (26・7・14)

この日宮本医師の診察を受けた後、日本新聞社に出社。子規は句の前書きでなくその日の様子を記している。

句意は、あつい日ではあるが日頃寐ていることの多い自分が、この日は、「日本新聞社」に出かけることができた。鳴りしきる電話の

鈴（ベル）は暑苦しいと言っているが、活気あるその中に身を置いていて喜びも感じられる。また電話という、まだ家庭には普及していない新しい文明の利器を取り込んで新しい俳句に挑戦している。

次の⑧から⑯までの句は未検討であるが、初期の鷗外作品を知る資料として左記に挙げるものである。

明治二十六年九月『衛生療病志』第四十五号

将梅闘

⑧ 蠅うちのけがれは血ではなかりけり

冷笑

⑨ 冷笑で四拾九手ある角力かな

関西一開業医

⑩ 人見えず誰が綱引いて鳴子哉

假情假涙

⑪ むしつたら羊志にやらう唐がらし

明治二十六年八月『柵草紙』第四十七号

盲新婦

⑫ 朝貌のあはれは唐になかりけり

比喩談

⑬ をとゞしの枯枝もまじる木萩（こはぎ）かな

凄涙

⑭ 百姓のこわ色なるかきりぐす

不二高根

⑮ 岩間をもよきては吹かず秋の風

暮行秋

⑯ これを嘗むる我に舌なき新酒哉

やはり寓意の句は背後の状況を知らないと、理解することが非常に難しいことを実感する。

今、詳細は解らないが明治二十六年は「傍観機関」論争、があり、これらの句の一部は、この問題に関係していると推定される。

三 子規と鷗外・戦場の出会い

鷗外と子規の金洲での出会いは、テレビドラマ、司馬遼太郎原作「坂の上の雲」でも放映され、よく知られるようになった。ここでは鷗外の「徂征日記」と、子規の「病牀日誌」、「柳田国男の発言」を記す。子規が金州に着いたのは四月十五日であり、四月十七日には日清講和条約が締結される。子規は五月四日鷗外を訪ね、以後五月十日まで毎日訪ね俳談を重ねる。

五月十日の別れに際し、几重等の歌仙一卷を手写して鷗外に贈っている。（几重は江戸中期の俳人。蕪村に師事し、のち、蕪村から夜半亭三世を継いだ）。強い意志をもって従軍した子規であったが、

一方で当時の子規が蕪村、几重に関心を持ち、連句（歌仙）にも興味を持っていたことが伺える。

1 鷗外「徂征日記」

五月四日、正岡子規来り訪ふ、俳諧の事を談ず。夜、神保と歌仙一卷を物す。

五月十日、和親成れりと云ふ報に接す、子規来り別る几重等の歌仙一卷を手写して我に贈る。（徂征日記 明28・5）

2 子規「病牀日誌」（明治28・6・5）

……森に金州にて會ひし話をせしや、余曰未也。患者曰「金州の兵站部長は森なりと聞き訪問せしに、兵站部長には非ず軍医部長なりし。これより毎日訪問せり」

3 柳田国男の発言

……鷗外さんが支那から帰って来て、非常に褒めてみましたね。今度の戦争へ行つて、非常に仕合せなのは正岡君と懇意になったことだ、と言つてゐました。

……恐らく、あの時分の日記とか手紙をみたら、正岡氏を褒めて居られる物が沢山残つてゐるだらうと思ふんです。野宮の中で頻りに文学を論じたらしいね。……鷗外のあの時代までの修養の中で、一番欠けてをつたのは発句でせうね。それを正岡氏がきつと教えてくれたんでしょう……

（座談会「俳諧と日本文学」・『俳句研究』第七卷第十二号・昭

和15・12・1）

四 「発句始」——明治文豪の句座（鷗外・漱石・子規）

明治二十九年一月三日、子規庵に於ける句会「発句始」は明治の文豪、鷗外、漱石、子規が出会い、句座を共にした画期的な出来事であった。これは虚子の提案で子規側から案内を出したものであった。

1 鷗外への誘い

私は「しがらみ草紙」や「水泡集」等を読んで鷗外には敬意を払つてゐました。鷗外に逢つてみたいと云ふやうな考えを持つてゐたのです。（略）戦争がすんで鷗外が凱旋して帰り、「めざまし草」が出るやうになりました。（略）鷗外も此頃から俳句に興味を持ちはじめたものと思ひます。（略）子規が根岸で俳句会をやる時に、鷗外にも案内して見てはどうかといふと、案内して見ようと手紙を出した。会が半ば進行してゐる時分に鷗外がやつて来たことがあります。

（高浜虚子『俳談』中央出版協会、昭18・9・10）

この文章からは当時、虚子が「しがらみ草紙」や「水泡集」等の鷗外の作品を読んでいたこと。そして鷗外に敬意を持ち、逢つてみたいと思つていたことが確認できる。金洲でも子規は、鷗外と聞いて自分の方から逢いに行つてゐることを思えば、当時の子規周辺の

若者達にとって鷗外は、大きな存在であったと思われる。

2 子規庵での「発句始」(『子規全集・第十五巻』俳句會稿)

日付 明治二十九年一月三日午後 上根岸八十二番地

表題 発句始

會者 鳴雪 鷗外 飄亭 漱石 虚子

可全 碧梧桐 子規(催主)

漱碧 霰降る片側町の長屋哉 可全

鷗 吶喊の又もや起る霰哉 飄亭

面白う霰ふるなり鉢叩 虚子

鳴飄 菜畑の次第上がり霰哉 碧梧桐

鳴碧^天 おもひきつて出て立つ門の霰哉 鷗外

可規飄^天 井戸端の鍋も盥も霰哉 鳴雪

漱^秀 湖の水にはぢく霰哉 子規

可飄 雨に雪霰となつて寒念仏 漱石

この日の鷗外の句は「おもひきつて出て立つ門の霰哉」である。この句は鳴雪と碧梧桐が選び、特に碧梧桐は天に評価している。また鷗外が選んだのは飄亭の句で、霰を関の声に準えた「吶喊の又もや起る霰哉」であった。それを考えると鷗外の「出で立つ」はやは

り戦場であろうか。軍人である鷗外の率直な心情が伺われる。そして、戦場の霰と云えばやはり実朝の歌「ものふの矢並つくるふ籠手の上にあられたばしる那須の篠原」の緊張感がイメージされていたかも知れない。

この回の高点句は鳴雪の「井戸端の鍋も盥も霰かな」であり、可全、子規、飄亭、虚子が選句している。たとえば子規庵の井戸端であろうか。突然降り出した霰が、そこに置かれている鍋や盥に吹き付けて、ばらばらと甲高い音を立てているという、視覚で捉えた日常の景に聴覚を交えて、霰そのものをもっとも霰らしく淡々と写生しているのが鳴雪の句であった。

写生を標榜する子規であるが現実には殆どの句が席題である。鷗外はこの事に違和感をもったのではないだろうか。しかも当季に限らずそれ以外の季節、また季節の題に限らず言葉の題も設定し、有季、定形のなかで感性を刺激し合い、想像力を駆使して新しい表現を模索していることが解る。この日も全て席題で次の通り計三十の季語や言葉にチャレンジしていた。第三回運座に「霰」の題が見える。

第一回運座「題」(計12)

霜月、禁川、枯野原、富士、上五文字暁の(春季)、鮫鱈、下五文字明けにけり(冬季)、元日、水仙、うかくと(秋季)、雪、厨(冬季)。

第二回運座「題」(計13)

冬住居、野末(夏)、霜、下五文字日影かな(冬季)、紙衣、干網(春季)、神輿部屋、うつむいて(冬季) 上五文字、蒲団、蓬萊、赤い実の(冬 上五文字)、煤払、鷹。

第三回運座「題」(計5)

下五文字土手の上(冬)、霰、雪洞(ぼんぼり)、冬川、夕鳥。

五 『めさまし草』を巡って

「めさまし草」は明治二十九年一月三十一日、鷗外によって創刊。明治三五年二月二十五日、巻之五十六号で終巻となっている。発行兼編集者は星野諤治郎、発行所は本郷区元富士町式番地盛春堂である。合評による文芸評論を主とし、鷗外、露伴、斉藤緑雨の「三人冗語」などがよく知られているが、今回は日本派の掲載俳句だけを見ていく。

子規とすれば偶々一月三日の「発句始」に鷗外に案内を出したことで、句会の座で話が進んだものか、結果的に『めさまし草』の創刊号から関わっている。「まきの一」には子規、鳴雪、飄亭、碧梧桐、虚子の俳句が二句ずつ計十句、虚子の「七部集」が二頁、「発句始」の席題「霰」に因み子規が提供したと思われる、芭蕉、去来、蕪村などの古人の「霰」の三十三句が掲載された。成瀬正勝は創刊号を次のように評している。

① 成瀬正勝『めさまし草』評

創刊号の編輯を見ると、進んで戦おうとするよりは、既成の作家達と結んで守成の姿勢をとったものといえ、また彼自らも「この草紙は今の文園にしげりあふめでたき花卉の間なる一小草ならんのみ」(創刊号p20)と謙遜している。とうてい『しからみ草紙』の(略)はげしさとは比較できないおとなしさであった。

(成瀬正勝『めさまし草』・「文学」 昭30・7)

尚和田克司編『子規の一生』に「月末 子規、千駄木観潮楼の鷗外を訪う」とあり、この頃殆ど歩行の出来なかつた子規が強い精神力で多分車を雇い『めさまし草』の校正に観潮楼に出かけたものと思われる。

② 『めさまし草・まきの一』掲載、子規以下十句。

大仏の蓮台高きあられかな 鳴雪

冬の夜の声かすかなり黄檗寺 同

絶壁に月かかりけり冬木立 子規

鶴鶴の刈株つたふ氷かな 同

我庵の木立ふりけり冬の月 飄亭

離別

凧に背をふかれて別れ行く 同

茶の花や洛陽見ゆる寺の門 碧梧桐

日吉社

宝塔に檜の風のみぞれかな

同

朝霜やぢやらんくと馬の鈴

虚子

年のくれ唯ぼうくと風が吹く

同

(明29・1)

(因みに虚子の「馬の鈴」の句は、後に漱石が「草枕」の峠の茶屋の場面で楽しそうに使っているフレーズによく似ている。「帳面をあげて先刻の鶏を静かに写生していると、落ち付いた耳の底へじやらんじやらん」という馬の鈴が聴え出した。)

③ 子規の「鷗外宛書簡」と「めさまし草」評

1 二十九年二月一日(子規より森林太郎宛書簡)

拜啓先日は失礼致候○めさまし草待兼ねて面白く拝見致候

就て読之際思ひつきたる悪まれ口書き記して御参考といかぬまでも御一笑に供へ度存書きかゝり候処考へて見ると新聞の方種切れ故新聞へ廻し置候 今度の週報御一覽下度候

但シあとで御叱りなき様今から願ひ置候 呵、

此四五日来例の腰骨が痛み出して今日杯は一步も動けぬ様に

相成候 悪口の罰にや

春を待つ迄に我がはや老いにけり

子規の「めさまし草 卷一批評」は地風評として二月三日「日本附録週報」に掲載。

子規は表紙についてかなり拘った評をしている。表紙は鷗外の親友原田直二郎で、創刊号からまきの十二までは蜘蛛の巣に二羽の蝶を配したもの、一年後のまきの十三からは同じく原田で大木に二羽の小鳥が愛らしく止まる絵に変わった。

「めさまし草 卷一批評」

地風評

○裱紙 先ず書を披かぬうちに裱紙こそ人の目を引く種なれ。第一新奇の点に於いて目のさむる心地するは此の雑誌の名に負ふ所成るべし。所謂紫派を斟酌して画かれたる蝶の黄色と反映して殊にうらかなる感を起さしむ。文学雑誌の裱紙に色を用うること帝国文学より始まりたりとはいへそれとこれとは赤と紫程の差異あるべし。(略)さて悪口に取りかゝらんに、第一紫の色に濃淡少なくして引き立たぬやうに覚ゆ。下のあたりを今少し明るく画きたらんには一層うらゝかに見ゆべくやと素人考えに考ふれどもいかゞや(中略)

(「日本附録週報」明治二十九年二月三日)

そしてさらに、第二は「位置の上に申分あり」として、蜘蛛の上に描かれた花、蝶、蜘蛛が殆ど等間隔に見えて「画家の働きがなきように覚ゆ」とし、第三は、三個の花片は剪綵花(せんさいか・造

花)に似たる嫌いあり。以下第六まで子規はこの批評のおよそ三分の一強を表紙に拘っている。表紙の画家原田直二郎は、明治二十三年鷗外と戸山正一との「日本絵画の未来」論争のきっかけとなった「騎龍観音」の作者である。「明治美術会」での戸山の演説「日本絵画の未来」は、新聞『日本』にも転載されているので、子規も興味を持って読んだと思われる。子規はこの件が頭を過ぎったかも知れない。

④ 子規、虚子に学ぶ鷗外

1 「鷗外より子規宛て書簡」(推定二月二十一日)

…めさまし草少々おくれ可申候 句及評論

にて大いに光彩を加へ大幸福に御座候

日本諸體日々おもしろく拝見仕候

落葉たく煙なびくや家の前

榊原少佐法会

みなしごのかしこまりたる寒さ哉

落書きの行灯くらし木菟の声

羽子一つくつついてゐるわたち哉

乞

大政

二十一日
子規 詞宗

林太郎

この書簡からは鷗外が子規の「めさまし草」評を読んでいること。日本諸體は子規が一月七日から新聞「日本」に掲載中の「俳句二十四體」と思われ、鷗外がこれに興味を持っていることが確認される。この書簡で鷗外が子規に評を乞う俳句は、一月三日の「発句始」の「席題」及び参加者の句からヒントを得て、鷗外が改めて句作り子規に評を乞うものと思われ、鷗外の俳句に対する熱意が覗かれる。

落葉たく煙なびくや家の前

鷗外

雪洞の廻廊渡る落葉かな

鳴雪

みなしごのかしこまりたる寒さ哉

鷗外

うつむいて物申したる寒さ哉

碧梧桐

落書きの行灯くらし木菟の声

鷗外

落葉吹いて雪洞きゆる裏戸哉

不明

羽子一つくつついてゐるわたち哉

鷗外

水かれて轍のあとや冬の川

漱石

2 虚子句に驚く鷗外と『めさまし草』への原稿依頼

……大根の花紫野大徳寺俳句ト云フモノハ斯ウモ力ヲ費ヤサズ

シテ面白キコトヲ言ハル、モノカト驚申候 三号ニハ句モ少々
御出下度正岡君ノ許へ御送りニテ同君等ノヲ併セテ出スヤウニ
ナレバ尤妙ニ御座候 (鷗外より虚子宛て書簡・明29:3:3)

鷗外は虚子の句「大根の花紫野大徳寺」に対し「俳句ト云フモノハ斯ウモ力ヲ費ヤサズシテ面白キコトヲ云ハル、モノカト驚申候」と感心しているのが注目される。句は「京都の大徳寺付近の紫野に大根の花が今を盛りと咲いている」という美しい光景。『万葉集』あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る(額田王)や、大根の花は諸葛菜とも云うので、諸葛孔明の故事などが想起されるのであろう。いずれにしても鷗外が子規達の写生句に注目し始めたことが感じられる。

また、「まきの二」には虚子の句だけ二十句が掲載されているが、以後鷗外の求めに応じて子規を中心とした日本派の句が多数掲載され、子規が育てた若い俳人の句も次々に名前が出る。明治二十九年は日本派の句が一気に広がっていくが、その一因としてビッグネームの鷗外が発行する『めさまし草』への掲載も大きく寄与したと思われる。

⑤ 「日本派」のチャレンジ

1 神仙體

『めさまし草・まきの三』 (明29:3:3)
春の夜の琵琶聞えけり天女の詞 漱石(他計十句)
怒涛岩を噛む我を神かと朧の夜 虚子(他計十句)

『めさまし草』は「神仙體」という挑戦的な試みの句にも発表の場を提供している。その結果、虚子の代表句の一つとされる「怒涛岩を噛む」の句が誕生している。

2 子規派の連句掲載(まきの七、まきの八)
子規が明治二十六年「文学に非ず」と否定した筈の連句二巻が、まきの七、まきの八に掲載される。

「まきの七・草庵」

門口に檜の下枝の茂りかな 子規
衣を更へて薪わる人 紅緑

渺々と田の面の風のわたらん 全

湖にのぞみし古城灯ともす 虚子

羽織着て名主へ参る夕月夜 規

案山子の顔の何に驚く 緑

「まきの八・歌仙」

芭蕉破れていまだ聞くべき雨もなし 碧梧桐

宵の嵐にかたわれる月 子規

うそ寒み栗飯喰ふ人老いて

桐

物引くあとの畠さびしき

規

鶏の親盗まれし竹の垣

桐

客と主と鰈釣りて居る

規

⑥ 『めさまし草』に見る鷗外句

鷗外の句は「まきの七」から「まきの十一」までに十句が掲載されている。

『めさまし草・まきの七』題「鮓」鷗外参加（明治二十九年七月）

山の家や留守に雲おこる鮓の石

子規

早鮓や東海の魚背戸の蓼

同

百韻の巻完うして鮓なれたり

鷗外

鮓鮓や生きて吉野の滝の魚

同

題「鮓」の鷗外句、

「百韻の」歌仙を完了した喜びに、食べ頃に出来た「なれ鮓」がふさわしいと言う句か。「なれ鮓」は魚介類を発酵させ酢を使わずに食べる鮓なので、歌仙も「なれ鮓」も時間がかかるという、やや知識にかたよった句。調べがなめらかであるといいが。

「鮓鮓」の方が新鮮な色が見えておいしそう、まして吉野の滝の鮓なら一入、滝の音が聞こえる。五七五の韻が気持ちがいい。「鎌

倉を生きて出でけむ初鱈 芭蕉」が連想される。

尚この『めさまし草』まきの七に掲載の句は、二十六句中、二十句が『新俳句』「鮓」に例句として掲載されている。

7 子規、虚子が選句する鷗外句

① 子規が選ぶ鷗外句（子規より鷗外宛書簡 明29・8・20）

「拜復 玉什拝誦、つくはひの御句わたくし氣に入り申候。右の句菱取ての句の次へ御はさみ被度候」

鷗外は他の句も示し、子規に選句を依頼した返事と思われる。『めさまし草』には子規の指示通りに掲載されている。

鷗外の父静男はこの年四月四日、肺気腫のため六十一歳で没している。

『めさまし草・まきの八』題「秋水」（明治二十九年八月）

三方は竹緑なり秋の水

漱石

藪陰や魚も動かず秋の水

漱石

菱取りて里の子去りぬ秋の水

鷗外

憶亡父

俯やつくばい覗くあきの水

鷗外

静かさに礫うちけり秋の水
人もなし日蝕うつる秋の水
『新俳句』「秋の水」にまきの八から十七句掲載
子規
同

『めさまし草・まきの九』 題「蠮螋」 (明治二十九年九月)

蠮螋の不覚を取りし最後かな
蠮螋や蟹の味方にも参りあはず
子規
同

蠮螋の夫は妻に喰はれけり
鷗外

蠮螋の斧を引きゆく小蟻かな
同

「蠮螋の」二句とも現実のことではあるが、即物的にすぎて、
気持ちよくない。

『新俳句』「蠮螋」にまきの九から二十一句掲載

② 鷗外から虚子への選句依頼

(鷗外より虚子宛て書簡・明29:10:16)

拙句

切株の木芙蓉兀として秋暮れぬ
行秋の案山子はくどにくべられぬ
ゆく秋や蝗あり縁に飛上る
ゆく秋やで、むし殻の中に死す
行秋の烟見送る烟草かな
行秋を物の種子干す翁哉

可然ものなくは折々はぬけても宜く強て拙きを出すのは体裁上
好ましからすと存申候

鷗外が「拙きを出すのは体裁上好ましからす」と書いているの
が微笑ましい。

筆者としては、案山子の句と、種子干す翁の句を選びたい。これ
を虚子が選べなかつたことにむしろ疑問を感じる。

次の『めさまし草・まきの十』を見ると虚子は、六句中二句「切
株の」と「行く秋や」と
を選んだことが判る。

『めさまし草・まきの十』 題「行秋」 (明治二十九年十月)

行秋をしぐれかけたり法隆寺
子規

月もあり黄菊白菊くるる秋
同

日の入や五重の塔に残る秋
漱石

行く秋をすうとほうけし薄かな
同

切株の木芙蓉(ふよう)兀として秋暮れぬ
鷗外

行く秋やでむし殻の中に死す
同

『新俳句』「行秋」にまきの十から十六句掲載

『めさまし草・まきの十一』 題「枯菊」

(明治二十九年十一月)

傘さして菊の枯れたる日和かな

子規

菊枯れて松の緑の寒げなり

同

もたれあひて花乍ら菊の枯れにける

鷗外

山茶花のこぼれけり菊の枯るゝ上に

同

六 その他の鷗外句

① 鷗外句の新聞『日本』掲載(10・20)

句会稿107

日時 明治二十九年秋(鷗外参加)

會者 碧梧桐 把栗 子規 鷗外 虚子 秋竹 露月 鳴雪

落水

水落す音に寝心よき夜かな

鷗外

くたびれた音や山田の落とし水

子規

鐘

野分する夜寺鐘樓に上りゆく

鷗外

(『日本』掲載)

腹にひびく夜寒の鐘や法隆寺

子規

名月

名月の樓に女の声すなり

鷗外

名月のこよひきかばや鉢叩き

子規

明治二十九年十月二十日、新聞日本に鷗外句が他の人々と共に掲載されている。事前の子規庵の句会に鷗外が参加していることが確認される。(句会稿107)

② 苦木虎雄『鷗外研究年表・明治29年』(この夏作る)

夕立やほつりくと石の上

鷗外

③ 『やまと琴』掲載句(『鷗外全集・十九卷「俳句」』)

菊枯れて梔黄ばむかき根かな

鷗外

菊枯れてしばし花壇の別れかな

同

枯菊や籠花活の蜘蛛のいと

同

(『やまと琴』第五調に三句載る 明29・12)

写生句に手応えを感じて、他の俳誌にも掲載したと思われる。

蚊になるや苜(あさぎ)の上の羽つくるひ

鷗外

梅檀は仏師か宿の蚊遣かな

同

(『やまと琴』第十二調に二句載る 明30・7)

七 子規の鷗外擁護(「松羅玉液」)

鷗外漁史、一言を發すれば衆口一斉に之れを攻撃す、是あながちに其説の誤れるを駁すといふにはあらで、只鷗外は生意氣な

り、やつ、けろくといふが如き観無きにあらず。吾無学にして其説の可否を判ずるに苦しむと雖もしかも其無学なる吾等にさへ筋も理屈もなき攻撃と思はるゝもの少なからず（略）屁鉢文学者は己の無能をあらはさじとて却つて鷗外の名を成したり。あら笑止（「松羅玉液」明治29・5・18）

鷗外への攻撃がよほど激しかったのか、子規が擁護にまわっている。

八 鷗外と子規の「草花」

1 鷗外年譜に綴る花の名前（明治三十一年）

*この年鷗外の日記に「花の名前」が頻出する。

子規との二年余りの俳句交流によつて、身のまわりの何気ない草花にも命があり、その生きる姿を写生することが俳句そのものの表現であることに気がついたのではないだろうか。軍医として、職業として戦う鷗外に、草花を見つめ、草花と対話すること、草花が潤いを与えたのではないだろうか。そして奇しくもこの年、子規もまた「小園の記」（『ホトトギス』二巻一号）、「吾が幼時の美感」（『ほと、ぎす』二巻三号）を発表しているので、期せずして二人の気持ちが共に草花に深く魅せられた時期であった。

| | | |
|----|-------------------|----------|
| 1 | 大森の梅開くと聞く。 | 二月二日（水） |
| 2 | 向島の梅の開くと聞く。 | 四日（金） |
| 3 | 吾家後園の梅も亦数枝綻び初めたり。 | 四日（金） |
| 4 | 後園のヒヤシンス花開く | 三月十七日（木） |
| 5 | 椿開く。 | 二十一日（月） |
| 6 | 連翹開く。 | 二十二日（火） |
| 7 | 木蘭開く。 | 三十日（水） |
| 8 | 桃、木瓜（ボケ）、早桜開く。 | 四月一日（金） |
| 9 | 秋花の種子を下す。 | 七日（木） |
| 10 | 棗棠開く。 | 十日（日） |
| 11 | 海棠（カイドウ）開く。 | 十三日（水） |
| 12 | 花壇をひろむ。 | 十六日（土） |
| 13 | 石楠花（シヤクナゲ）開く。 | 十八日（月） |
| 14 | 躑躅（ツツジ）開く。 | 二十五日（月） |
| 15 | 桐、藤の花開く。 | 五月十日（火） |
| 16 | 卯花開く。 | 十四日（土） |
| 17 | 菖蒲、白及び華開く。 | 十六日（月） |
| 18 | 萱草（カンゾウ・忘れ草）開く。 | 二十日（金） |
| 19 | 罌粟（ケシ）、銭葵開く。 | 二十一日（土） |
| 20 | やぐるま草開く。 | 二十三日（日） |
| 21 | 小桜草開く。 | 二十四日（火） |
| 22 | 鉄線花開く。 | 二十九日（日） |

| | | |
|----|---|---------|
| 23 | 玫瑰（ハマナス）、あらせい（ストックの和名）開く | 三十一日（火） |
| 24 | 葵、凌霄葉蓮（ノウゼンハレン・ナスタバチユウム） | |
| | 沢桔梗、せんとう等開く。 | 六月八日（水） |
| 25 | 玉簪（タマノカンザシ）開く。 | 十一日（土） |
| 26 | 金糸桃（ビヨウヤナギ）開く。 | 二十二日（水） |
| 27 | 鉄砲百合開く。 | 二十五日（土） |
| 28 | 萱草、桔梗、「ダリアス」、薊（アザミ）罌粟（ケシ）開く。 | 七月三日（月） |
| 29 | 百日草開く。 | 六日（水） |
| 30 | みそはぎ開く。 | 十二日（火） |
| 31 | 石竹、おいらん草、凌霄（ノウゼン）、孔雀草射干（ヒオウギ）、敗醬（はいしょう・オミナエシ）等開く。 | 十七日（日） |
| 32 | 百日紅（サルスベリ）開く。 | 二十二日（金） |
| 33 | おしろい開く。 | 二十三日（土） |
| 34 | 朝顔、縷紅（ルコウソウ）開く。 | 二十七日（水） |
| 35 | 百合開く。 | 三十日（土） |
| 36 | 紅蜀葵（モミジアオイ）開く。 | 八月五日（金） |
| 37 | 萩開く。 | 二十日（土） |
| 38 | 芙蓉開く。 | 二十一日（日） |
| 39 | 向日葵開く。 | 九月八日（木） |

（カタカナ読み筆者）

鷗外は以上約50種余りの花の名前を日々の日記に記し、その開花に心ときめいた年であった。

石川淳は、「余事ながら、鷗外には花卉草木の愛に憑かれて
いる一面があった。前に「園芸小考」（明治二十九年）があり、
後に「田楽豆腐」（大正元年）がある。随筆に「サフラン」（大
正三年）がある。」（石川淳『森鷗外』近代作家研究叢書・昭
16・11・30）と指摘している。

鷗外が草花に心を奪われていたこの時期、子規もまた草花に
関して『ほととぎす』に同年十月、著名な「小園の記」、そして
十二月には「吾幼時の美感」を発表する。

2 鷗外の庭（長男・於菟の証言）

私の父は草花を好んだ。それを花壇や温室をつくらず、種子
を蒔けば芽を出し花をつけるものを自然のま、に生ひ立たせ
た。しおん、とらのを、女郎花、おしろい花に矢車草、乃至
鳳仙花、葉鶏頭なぞが主なるもので、ことに秋草のさかりの
頃には、二十坪ほどの後庭は色とりどりの花に埋められて美
しかった。

（森於菟『木芙蓉』昭11・9・16 時潮社）

3 子規の「小園の記」

我に二十坪の小園あり。（略）一年軍に従ひて金州に渡りしが、

其帰途病を得て須磨に故郷に思はぬ日を費やし半年を経て家に帰り著きし時は秋まさに暮れんとする頃なり。(略)ありふれたる此花、狭くるしき此の庭が斯く迄人を感じせしめんとは嘗て思ひよらざりき。(略)今小園は余が天地にして草花は余が唯一の詩料となりぬ。(略)

従軍によつて家を離れ、およそ八ヶ月余りを経て帰宅した子規は、初めて庭のありふれた草花の魅力に気が付く。鷗外が「発句始」(明治二十九年一月)で最初に子規庵をおとずれたのは子規がそのような心情を持ち始めた時期である。冬枯れの頃であつても、子規がその小さな庭の、様々な草花と丁寧に向き合つて、写生説の基盤としている現実を目にしたであろう。軍人である鷗外にとつて、その視点はこれまで思いもつかなかつたことではなかつたらうか。だからこそ鷗外は子規に草花の種を贈り、また自分の家にも二十坪ほどの草園を作つたと思われる。鷗外の裏庭も、子規の庭も共に二十坪の草園、と一致している。

去年の春彼岸や、過ぎし頃と覚ゆ、鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを直に蒔きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉鶏頭をほしかりしをいと口をししく思ひしが、何とかしけん今年夏の頃、怪しき芽をあらはし、者あり。去年葉鶏頭の種を埋めしあたりなれば必定それなめりと竹を

立て、大事に育てしに果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくてあたりの昼照草など引きのけやうく尺余りになりし頃野分荒れしかばこればかり気遣ひしに、思ひの外に萩は折れて葉鶏頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖にしばらくなどせしかば恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。痩せてよろしくとしながら猶燃ゆるが如き紅、しだれていとうつくし。

(『ほと、ぎす』二巻一号・明31・10・10)

*「小園の記」は写生文の最初のものでして評価が高いが、鷗外との細やかな草花の交流から誕生していることはあまり語られることがない。

4 子規「吾が幼時の美感」

……幼時より客観美に感じ易かりし吾は我家の、一として美とすべき者無きを見て心に樂します、(略)常に他人の身の上の妬ましく感ぜられぬ。ひとり造化は富める者に私せず、我が家をめぐる百歩ばかりの庭園は雑草雑木四時芳芬を吐いて不幸なる貧兒を憂鬱より救はんとす。花は何々ぞ。

百年を過ぎた桜の大木、桜の下に八重の花石榴、暗き所に木瓜、椿、つつじ、白丁、サフラン、黄水仙、玉簪花、アヤメ、シヤガ。自分で土手より掘り来た蘭、山吹と石菖。北側に芍薬一本、八重、孔雀草、天竺牡丹、昼照草、丁字草、薄荷、西は島、東に花シャウブ、トリカブト、桃の若木、無花果の下に萱草、

小菊一うね、猿丸とは赤くて花の多くつく菊なり。(略)

花は我が世界にして草花は我が命なり。幼き時より今に至る迄野辺の草花に伴ひたる一種の快感は時として吾を神ならしめんとする事あり。殊に怪しきは我が故郷の昔の庭園を思ひ出す時、先ず我が眼に浮ぶ者は、絢爛たる桜にもあらず、妖冶(ようや)たる芍薬にもあらず、溜壺に近き一うねの豌豆と蚕豆(空豆)の花咲く景色なり。如何なる故か自ら知らず。若しちひさき神の此の花に宿りて吾をなやましたまふらん。いとおぼつかなし。

(『ほと、ぎす』二巻三号・明31:12:10)

*子規は「草花は我が命なり」と言い、また「百歩ばかりの庭園は雑草雑木四時芳芬を吐いて不幸なる貧兒を憂鬱より救はん」と記しているが、鷗外も又、草花を植えてその成長、開花のうれしさを日記に記すことよって、草花に救われることのあることを実感したのではないだろうか。鷗外の句が子規の写生句に近づいて行くのは、こうした草花の美しさ、愛しさ「自然」の四季の運行の不思議さに気がついたからでは、と想像される。

○ 俳誌『ほと、ぎす』東京発行となる

明治三十一年十月十日、高浜虚子が発行人となり、俳句雑誌

『ほと、ぎす』が東京で発行される。この時虚子が柳原極堂から簡単に引き受けて子規を驚かせたが、鷗外の年譜をみると明治三十一年五月八日に、虚子が観潮楼を訪れ、鶴田禎治郎、牧山健吉、大村西崖、鷗外の弟篤次郎とともに『めさまし草』の校正をしているので、虚子はこうした経験から雑誌発行に興味をもっていたと思われる。

九 鷗外の子規評価(「鷗外漁史とは誰ぞ」)

明治三十三年一月一日福岡日日新聞に「鷗外漁史とは誰ぞ」が掲載される。ここで鷗外は「今日の文壇は露伴等の時代に比すれば、末流文壇である」と手厳しく評したが、子規だけは評価しているのである。

今の文壇というものは、鷗外陣亡(うちじに)の後に立ったものであって、前から名の聞えて居た人の、猶その間に雑つて活動しているのは、ほとんど彼ほととぎすの子規のみであろう。ある人がかつて俳諧は普遍的徳があると云つたが、子規の一派の永く活動しているのは、この普遍的徳にでも基いて居るのである。(略)

明治の聖代になつてから以還このかた、分明に前人の跡を踏まない文章が出たということは、後世に至つても争うものはあるまい。露

伴の如きが、その作者の一人であるということも、また後人が認めるであろう。(略) また前に挙げた紅葉等の諸家と俳諧での子規との如きは、才の長短こそあれ、その中には余の敬服する所のものがある。

(「鷗外漁史とは誰ぞ」福岡日日新聞 明33・1・1)

ここで鷗外は「前から名の聞えていた人の、猶その間に雑じつて活動しているのは、ほとんど彼ほととぎすの子規のみであろう」と云っているがこの文章の全半に「明治の時代中ある短日月の間、文章といえ、作に露伴紅葉四迷篁村緑雨美妙があつて、評に逍遙鷗外があるなどと云つたことがあつた」と記している。「前から名の聞こえていた人」はこの自分自身も含めた八人を指す。そして明治という新しい時代の寵児として文壇を風靡したこれらの人々もあつたという間に、次の世代の人々に取って代わられて名を聞くこともないという文壇の流行の移り変わりの激しさ、むなしさを実感する。その中で俳句の子規のみが活動しているのは、本人の能力、才能ばかりではなく、俳句にある「普通の徳」に基づくものであると云っているのは考えさせられる。「普通の徳」について鷗外は「ある人がかつて云つた」としているが、この論文に前述した「文海の藻屑」で鷗外が引用している各務支考の『俳諧十論』(享保四)に「俳諧の徳」があり、「天理に従うべきことを説く」(『俳文学大辞典』)とされる。それは子規の「写生」とも重なるものがある。鷗外は子

規との俳句実作の交流の中で、体得した実感でもあつたと思われる。

十 小倉日記に記す鷗外の俳句

鷗外は、明治三十二年六月八日、一時は「退役も決意した」とされる小倉に赴任する。左遷と云われる。この時代の「小倉日記」には六十二句の俳句が記されている。この頃の俳句の特徴は日々の風景や感興を日記の一部として句に書きとめていることである。以下にその様子を見たい。

○ 夢成らず蚊張近く聞く雨の音

*八月三十一日の日記に記されている。失意の中を小倉に赴任して初めての句。鷗外の孤独感が率直に表現されていると思われる。そしてそれはまた、誰にも訪れるであろう人生の失意と孤独にさりげなく寄り添う一句となっている。

「芭蕉野分して盪に雨を聴夜哉」の芭蕉句が思い出され、不遇な文人の孤独も連想される。かつて鷗外は千駄木に引っ越した時、まず最初に庭の隅に芭蕉の木を二本植えたことを明治二十五年九月十八日の日記に記している。(季語・蚊張・夏)

○ 菊畑や暮れのこる白のところく

(子規 参考句「月もあり黄菊白菊暮る、秋」)

（『めさまし草・まきの十』、

『日本』・「俳句二十四體」・「音調體」）

*十月二十三日の日記。「借家後圃の菊咲き始める。南の縁先に座つて日暮れを迎え、一句を得る」とある。

菊の畑と云うことは、花屋に出回るいろいろの色の菊を広範囲に栽培しているのであろう。夕暮れにその辺りを通ると、紫や赤の菊はすでに闇に紛れているが、白い菊だけはところ／＼にふんわりと、夕闇の忘れもののように浮かんでいる。一読して誰にでもその情景が浮かぶ写生句で、夕暮れの本意を描いて美しい句である。（季語・菊・秋）

また、「一句を得る」という表現にも注目したい。「作る」とは言っていない。

○ 縁の戸やことり／＼雪のよもすがら

（子規 参考句「侘びぬれば田螺鳴くなり夜もすがら」）

*一月六日の日記。「雪降る。夜に入つて、地上に積もる」。

雪降る夜、時々風が吹くらしく縁側の戸がことり／＼と鳴る、まるで雪が戸をたたくように。その静けさ。子規句の「侘びぬれば」に共感しながら、空想の俳諧季語「田螺鳴く」を、同じ聴覚でも、本来音を吸い取るとされる雪が、音を発して戸をたたくとして今、ここ、を詠む実感の一句としている。（季語 雪・冬）

子規の句は、新聞「日本」に掲載の「俳句二十四體・雅樸體」（明

治29・1:24）の巻頭例句。鷗外は「俳句二十四體」を読んでいることを書簡で子規に告げている。

○ 海きら／＼帆は紫に霞けり

（子規 参考句・きら／＼と鳥の飛びゆく春日かな）

「俳句二十四體・即景體」・

*三月十六日の日記。「京都を出発、西に下る。春の気配がする。明石で一句作る。」

きらきら輝く波頭、「帆は紫に霞けり」の詩的表現。見て感じる実感の強さがある。（季語・霞・春）

○ 筆とれば若葉の影す紙の上

*五月九日の日記。「終日家居。新来の書籍を読み、書状の整理をする。」

若葉と云えば戸外、手許の紙の上に若葉を感じる句は非常に珍しく新鮮。（季語・若葉・夏）

○ 花蜘蛛の軒に幾日さみたる、

*七月七日の日記「夕方よりまた大雨となる。（略）俳句五句を得て日記に録す。」の中の一句。五日程雨が続けている。花蜘蛛は女郎蜘蛛か、美しく糸を張って、美しい体で獲物を待つが長雨ですることもない、自らの無聊を仮託して面白く表現している。（季

語・五月雨・夏)

○ 昼寝せんけふも隣のいと車

*七月十五日の日記「雨。昨日と同じような天気で、うつつうしい。この頃、隣家からいと車の音が絶えず聞こえる。ようすを聞くと、親戚の目の不自由な女の人が寄寓して、糸をつむいでいるのだという。一句を得て記録する。」糸車の音を拒むのではなく、生活の一断片と受けいれて俳句にまとめている。日常的に俳句を続けることで次第に心がやわらかくなっていくようである。(季語・昼寝・夏)

○ 日はあかしくししよりうとんぼ身を繞る

*十一月七日、手帳に書きとめてあったもの十七句をまとめて記録している中の一句。

精霊蜻蛉であろうか。「あかしくと日はつれなくも秋の風」の芭蕉句を連想させる。残暑の太陽はまだあかしくと照り付けているが、その夕映えの中を精霊とんぼが飛んできて身の周りをめぐり、秋を感じさせることだ。(季語・とんぼ・秋)・

終わりに

子規はかつて言葉の組み合わせが極限となり、俳句は明治に滅びると語っていたが、しかし鷗外は、俳句は日常的な「俗談平話」か

ら詩材をとり、「汎通の詩性」を持ち込む事ができるので滅びることはないと考えていたと思われる。俗語を日常に求め詩語として高めるその方法が写生ではないだろうか。鷗外はこの「滅びない」という俳句に対する信頼をもって、子規と俳句を「少しして見た」のだろう。子規の到達点は写生であり、写生は「一寸浅薄のように見えても、深く味へば味はふ程変化が多く趣味が深い。写生は平淡である代わりに、さる仕損ひは無いのである。さうして平淡の中に至味を寓するものに至っては、その妙実に言ふ可からざるものがある」〔病牀六尺〕『日本』明35・6・26)と云う。鷗外の俳句は自らが「文海の藻屑」で述べた理論の実践であろう。しかしやってみると難しい。かの鷗外が子規とその俳句に対して、全く非難せず評価しているのは、新しいものを生み出そうとする子規の絶えざる試行錯誤に対する評価と、後には「平淡の中に至味を寓する」写生句がある程度理解したからではないだろうか。「至味」はこの上もない良い味、またはそのものとされるので、写生は単なる写生ではなく、この上もない「味わい」、「趣」、「感動」、などの、心の表現をも寓するものである。

鷗外の作品を辿ると初期作品に見られるような、俳句を、胸中の苦渋の発露として捉えていた観があるのに対し、子規との交流を経験して以後、写生句が増えてくるに従い明らかに味わい深い佳句が生まれてくることを改めて実感する。特に明治三十二年以降の小倉時代の句に感銘深いものがある。鷗外もまた子規との交流の中で、

子規の辿り着いた「平淡のなかに至味を遇する写生」の境地に辿り着こうと歩み続け、変化して行っただと思われるのである。(終)

参考文献

- 『めざまし草』創刊号(まきの二)〜終刊(卷之五六)
『ほと、ぎす』第二巻第壹号、第貳号
『鷗外全集』十九巻、二十二巻、二十三巻 岩波書店
『子規全集』「俳論俳話」「書簡」「年譜」「俳句會稿」「俳句選集」講談社
寒川鼠骨『正岡子規の世界』青蛙房 昭和31:10:15
ドナルド・キーン『正岡子規』新潮社 2012:8:30
苦木虎雄『鷗外研究年表』2006:6:25
和田克司編『子規の一生』増進会出版社 2003:9:20
堀切実『最短詩型表現史の構想』岩波書店 2012:1:30
松井利彦『正岡子規』桜楓社 1967:1:20
宮坂静生『正岡子規―死生観を見据えて―』明治書院 平成一三:九:一四
宮坂静生『子規秀句考―鑑賞と批評―』明治書院 平成八:九:一五
俳句教養講座第一巻『俳句を作る方法』角川書店 平成二一:一一:二五
俳句教養講座第二巻『俳句の詩学・美学』角川書店 平成二一:一一:二五
山田吉郎『明治短歌の河畔にて』2014:5:9 短歌研究社

Mori Ogai's Haiku style around 1897 — through interaction with Masaoka Shiki

NEMOTO, Ayako

Haiku by Mori Ogai is not so famous now, however Masaoka Shiki recognized him as one of the greatest Haiku poet at the time. Mori Ogai stepped up as Haiku poet by three significant interactions with Masaoka Shiki. At first, he attended a Haiku party at Shiki-an in January 3rd, 1896. Masaoka Shiki and Mori Ogai and Natsume Soseki, who were great literary figures in Meiji-era, gathered at the party. Secondary, he interacted with Shiki's Haiku party on Haiku magazine called "Mesamashi-kusa", which issued by him. Finally, He and Masaoka Shiki expressed strong interest in plants and flowers in 1898.

This paper explains these three interactions and introduces details drawing books written by Mori Ogai and Masaoka Shiki.